2024年度大学礼拝アンダハテン

第 43 号

フェリス女学院大学

宗教センター

主御自身があなたに先立って行き、主御自身があなたと共におられる。主はあなたを見放すことも、見捨てられることもない。恐れてはならない。おののいてはならない。

申命記三十一章八節

目次

まえがき……学長　小檜山ルイ　4
あなたの御言葉は、わたしの道の光……関　智征　7
闇の中を飛ぶ時……饒平名尚子　12
新しい日々に寄せて……次郎丸智希　20
わたしに学びなさい……秋岡　陽　24
「出エジプト記」で祝福されたのはモーゼだけなのか？
～『十戒』（セシル・デミル監督，１９５６年）を学び捨てる～……藤巻　光浩　29
自由意志って本当にあるの？……荒井　真　34
宗教改革とエキュメニズム……藤原佐和子　39
宗教改革がめざす未来……相澤　一　45
奇跡という希望……Ｋ・Ｒ　51
話しかけられたので……和寺　悠佳　57
天使が来るのは、誰のところ……松村はるか　62
クリスマス・キャロル……松本奈穂子　66

求めなさい。探しなさい。……N・H 71
大きな家……T・O 76
二〇二四年度　学内礼拝担当表……82
あとがき……宗教主事　相澤　一 86

本書における聖書の日本語訳は、基本的に『聖書　新共同訳』（日本聖書協会）から引用されますが、執筆者の判断に基づいて異なる訳文が提示される場合があります。

まえがき

２０２４年度の「大学礼拝アンダハテン」を今年もお届けします。フェリス女学院大学で毎日12時20分から20分間行われている礼拝で話されたことの一部が収録されています。

礼拝で聖職者ではない、一般の信徒が話すことは、主に宗教改革以降にプロテスタンティズムの伝統の中で培われてきました。そこには、聖書を信仰の唯一の拠り所とするという考え方、つまりは、カトリックのように聖職者組織を人と神との間に挟まない、挟むべきではない、という主張があります。だから、聖書を土着の言語（フランス語とか、ドイツ語とか）に翻訳し、一般の人が読めるようにすることは、プロテスタンティズムにとって最重要課題でした。ルターが聖書をドイツ語に翻訳することに鋭意努力したのは、そのためです。さらに、一般信徒が、土着言語を読める能力（識字能力）を獲得しなければ、せっかく翻訳しても、ほとんど意味がありません。だから、プロテスタントは、教育熱心になりました。

そこから、一般信徒が説教壇に立って、説教をするというところに至るには、かなりの紆余曲折がありました。なぜなら、聖書は多様な読み方（解釈）が可能な書物で、誰もが説教壇から自分の考えを発信したら、大混乱が起きる可能性があるからです。17世紀にマサチューセッツ湾岸植民地（今のボストンの辺り）に派遣されたロジャ・ウィリアムズという牧師は、自分と同じ信仰を持つ

者は自分と妻だけだと指摘し、だからこそ、一定の信仰のあり方を押しつけるのは正しくないとして、信教の自由と政教分離を主張しました。前者を認めなければ、カトリック的立場に逆戻りすることになります。また、一定の信仰を政治に結びつければ、究極的には、抑圧的・専制的にならざるをえません。彼は当該植民地の指導的聖職者たちと対立し、インディアンの協力も得て、プロヴィデンス（ロードアイランド）に信教の自由を保障する新たな植民地を作りました。その結果、この植民地には、様々な信仰、主張をもつ人たちがやってきて、それぞれに思いのままの主張をし、税金は払わない、植民地防衛のための兵役も拒否、という具合で、ウィリアムズはたいへんな苦労をしました。プロヴィデンス植民地は、「はきだめ」とさえ呼ばれたのです。

現代、X（旧twitter）等で発信される、ヘイト・スピーチ、デマ、中傷が問題になっていますが、それを政府が規制することについて、言論の自由（信教の自由はその前提です）との関係で様々な懸念や反対が表明されています。「自由」は、当たり前ではなく、血を流して獲得してきたものですので、たとえ政府規制がヘイト・スピーチを禁止するといったまともなものであっても、その規制がいつ何時不合理な抑圧に転用されるかわからないから、警戒されるのです。信教の自由については、世界平和統一家庭連合（旧統一教会）が今政府相手に争っています。２０２３年10月に、文部科学省が世界平和統一家庭連合に対する解散命令を東京地裁に請求したからです。結論はまだ出ていませんが、教団から被害を受けた人々がいるなかで、信教の自由をどこまで認めるのか、難しい審判になるでしょう。

フェリス女学院大学の説教壇から自分の考えや経験を発信するということは、以上のような、「諸刃の剣としての信教の自由」という歴史的背景と現代的問題を背負っています。普段、平和的に淡々と行われている礼拝ですが、緊迫した論争の可能性を秘めた場であることを忘れないでいたいと思います。

学　長　　小檜山　ルイ

あなたの御言葉は、わたしの道の光

詩編一一九：一〇五-一一二

関　智征
（キリスト教学）

野ざらしを　心に風の　しむ身かな（松尾芭蕉）

松尾芭蕉は人生の苦悩と困難を「野ざらし」という言葉で詠みました。旅に生きた芭蕉は人生の侘び寂びや風流と、旅の情景とをしばしば重ね合わせていました。

旧約聖書の詩編一一九編は、私たちの人生は「旅の人生」であると言っています。「この地では宿り人（寄留者）にすぎないわたしにあなたの戒めを隠さないでください（詩篇一一九：一九）」「この仮の宿にあってあなたの掟をわたしの歌とします（詩篇一一九：五四）」など、私たちがこの地上では旅人であり寄留者であることを歌います。

人生の旅において、聖書こそが私たちを導く光です。

あなたの御言葉は、わたしの道の光わたしの歩みを照らす灯（詩篇一一九：一〇五）

私自身、人間関係に悩む時、心が沈む時、聖書のことばに支えられ、その光に導かれて生かされてきました。私がクリスチャンになったのは20年以上前の学生時代でした。もともと「正月は神社、お葬式はお寺、クリスマスは家でケーキ」という家で育ったので、キリスト教にはご縁がありませんでした。

ところが大学入学後、所属していた体育会テニス部の練習場の近くにあるという理由でキリスト教の学生寮（東大ＹＭＣＡ寮）に住み始めたことでキリスト教との接点ができました。寮では毎朝、讃美歌を歌い聖書を読み祈る会がありました。クリスマスに劇や合唱をしたのが楽しい思い出です。

寮に入った時は「聖書は、グローバルスタンダードであり教養として少しカジッておくもの」くらいのつもりでした。しかし、いつしか私の中で聖書が「生きるためのもの」に変わってきました。大学4年生の時、大学の友人との人間関係の中で怒りがおさまらない、赦せない出来事が起きました。「被害者の自分は何も悪くない。相手の加害者は謝るべき」と私は加害者への憎しみの気持ちをもっていました。ただ相手が変わること、謝罪することを期待しても、思うようにはいきませんでした。

挫折の中で、ふと自分の人生を立ち止まりました。もし聖書のいうように、相手を憎む自分の弱さ、自分の正しさや権利を主張する気持ち、自分は正しいという思い、自己憐憫の感情が「罪」で

あり自分の罪を神様に赦してもらっているなら、自分も相手を赦せるかもしれない。そのように思い、友人たちや牧師に支えられながら、信仰や聖書の内容もよくわからないまま洗礼を受けました。

御言葉が開かれると光がさしいでて、無知な者に理解を与える。（詩篇一一九：一二九）

洗礼前から寮や教会で聖書を読んだり讃美歌を歌ったりしていました。しかし、洗礼を受けた後に同じ聖書の言葉を読んだり聴いたりしていても、自分の心への言葉の染み込み方が変わりました。聖書の言葉が開かれ光がさしこむ体験でした。聖書を読んでいる中で、人間関係の知恵をもらったり、落ち込んでいる時に明るい気持ちで前向きになれた経験は新鮮でした。

洗礼を受けてしばらくすると、自分が日常生活で無意識で行ってきた「ある一つの行為」が、知らず知らずのうちに周囲の人に迷惑をかけていることに気が付かされました。**「自分は特に悪いことをしていない」と相手を恨んでしまう自分の愚かさ、弱さを持つ私のためにこそ、主イエス・キリストが身代わりになって十字架につけられた。**そのイエス様に赦してもらわなくてはいけないのは、私自身だったことに気が付きました。「自分が頑張ってきたから自分の権利だ」と当然と思っていたものが、実は神の恵みだったことを知り感謝の気持ちでいっぱいになりました。聖書を読むことが楽しくなりました。この「自分が赦された喜びを伝えたい」という体験が牧師を志す原点です。

私たちは、毎日の生活で、電気があることがつい当たり前のように錯覚します。しかし、光があることは実は有り難いことです。私が小学校低学年の時に停電がありました。その時、自分の足元も見えなくなりました。停電で真っ黒な中、大きな恐怖に襲われました。暗闇の中で震えながら懐中電灯を手がかりに恐る恐る子供部屋があった2階から降りていったことを覚えています。足もとを照らす灯火がないと暗い中で前に進めないことをその時に体験しました。

また私はあるとき、新潟の郊外を車で運転していました。深夜でも明るい首都圏では想像できませんが、地方都市で郊外に行くと、あたり一面が田んぼや畑で真っ暗な場所でした。暗くシーンと静まり返った郊外のエリアを運転していたら、街頭も反射板もないエリアに入ってしまいました。近くの数メートル先までは車のライトで見えますが、遠くは真っ暗でした。このまま道路はまっすぐ伸びているのか、右に伸びているのか、左に伸びているのかが見えませんでした。「田んぼに突っ込んだらどうしよう」と不安になってきました。その時、遠くに街灯が一つだけみえ「道路はこの方向に伸びているんだ」と安心したことを覚えています。

私達の人生の旅の中でも、順調な運転の時もあれば、逆境に苦しみ「お先真っ暗」に思える時もあります。病気、貧困、友達や家族とのトラブル、仕事や学業の失敗…。自分の力ではどうしようもなくなり八方塞がりとなることもあるかもしれません。人生の旅で野ざらしが心にしみるような体験をお持ちの方もいるかもしれません。

しかし、「私は世の光である」というイエス・キリストに出会う時、信仰、希望、愛が私達の内に与えられます。私が牧師として仕えている目黒駅の行人坂教会のメンバーで星野文雄さんという方がおられました。5年前に天に召された方です。星野さんが洗礼を受けてクリスチャンになると嬉しくて仕方なかったそうです。彼は喜びに満ちて、日曜礼拝の後教会の近くのお蕎麦屋さんに食べに行っても店員さんに「聖書はいいよ！イエス様はいいよ！」と話していたそうです。このように聖書の言葉に出会い、イエス・キリストに出会う時に、喜びや平安が与えられます。

誰もが「これから私の人生はどうなるのか」と将来が不安になる瞬間があります。安心安全な人間関係を求め、信じられる言葉を探しています。

道を求める私たちには聖書の言葉こそがこの世を照らすまことの光です。私たちの歩む道が主の光に照らされる時に、将来と希望があります。ぜひ、これから人生の旅の中で素敵な言葉に出会うことができますように心よりお祈り申し上げます。

【お祈り】

いつくしみ深い父なる神様。聖書の言葉は、私たちの希望の源であり光です。私たちの道を照らしてください。私たちの人生の道を照らし、他者のために尊く用いて下さい。お一人お一人を光あるうちに光あるほうへ導いてください。イエス・キリストのお名前で祈ります。アーメン。

（二〇二五年五月一六日　緑園）

「闇の中を飛ぶ時」

箴言三章六節、「つねに主をおぼえてあなたの道を歩け。そうすれば主はあなたの道筋をまっすぐにしてくださる」

饒平名　尚　子
（言語学・英語学）

皆さんは今人生の中のどんなところを歩いているでしょうか。明るく希望に満ちた日々であることを願いますが、人生はそのような日々だけではないことは皆さんもご存じのことと思います。これからの先行きがわからない不安や、今が楽しければそれで本当にいいのだろうかといった漠然とした疑問。そのようなものとまともに向き合うことの恐れ。それでも幸せを求めて、少しでも今よりも良い生活になることを願って、日々努力を重ねている。そんな私たちかもしれません。ゼミの3、4年生と話していると、特に就職活動をめぐってそのような思いや迷いがとても大きく苦しいものだと知らされます。

では、就活がうまくいけば、卒論が書ければ、不安は消えて幸せな人生をそのあとは生きられるのか、と言えば、残念ながらそうではありません。目の前の問題は一時的に解決しても、次にまた

うまくいかないこと、つらいことは様々におきます。

以前、知り合いから言われた言葉がよく頭をよぎります。それは、人生を飛行機の操縦に喩えたことばでした。夜の暗闇の中を操縦して飛ぶ時、窓の外を見ると、星と地上のかすかな灯りとの区別がつかなくなる時があるそうです。大都会のすぐ上空ならまだしも、そうでない暗闇の中では、信頼できるのは自分の視力や勝手な思い込みによる判断ではない。そんな時必要なのは、正しい方向を示す計器の針。それを頼りに、暗闇の中、進む方向を知り、飛行する必要があるのだそうです。怖くても、暗闇でどれが本当の星かわからなくなっても、正しい計器があれば、それを見て進んでいくのです。これと同様に、人生を歩むときには、自分の狭い小さな知識だけに頼るのは危険であるとその友人は言います。正しい方向を示す指針に従う必要があり、人間にとってそれは、人間を造られた神のみが与えることができるものだ、とその人は話してくれました。

何かの製品をどう使うかがわからない時は、その製品の取扱い説明書を読みます。取扱い説明書はその製品を造った人が作成します。どうしたらその製品が機能し、動くのかは、作った人が一番よくわかるからです。では人間の場合はどうでしょう。人間も、人間を造られた方から示される取扱い説明書を確認することが、人が人らしく生きていく上で重要になります。私たちを造った方がおられるとしたら、その方は私たち人間がどう歩むことが幸せに続く道なのかを示す指針を与えることができるのです。人間の考える価値観は時代や状況によって変わっていきます。少し前まではＳＮＳで「いいね」を沢山もらうことが幸せだと思って、それを競い合い自分自身を見失う人もい

ました。他の人の価値観に振り回されて疲れ果てていくことは、私たちの誰もが経験することです。そんな時、自分を振り返り、立ち帰って考えたいのが、ぶれることのないものに従って人生の暗闇を飛んでいくということです。

暗闇の中を孤独に歩むとき、勿論友人や家族がいて話を聴いたり相談にのったりしてくれるかもしれません。しかし、時に友人だと思っていた人から批判されたり、身近な人さえ理解してくれないことに苛立ちを覚えることもあります。自分の能力の無さ、あるいはついていないことばかり多いような気がして情けなくなる時もあります。就職活動は多くの学生にとってまさに他者との比較の中で自分に自信がなくなり、焦ったり落ち込んだり、出口のないトンネルに入り込むような経験でもあります。

そんな時、聖書のことばは何を私たちに語るのでしょうか。宝を探すように神様の語りかけに耳を澄ませるならば、神様は必ずその求めに応え、希望と励ましを与えてくださいます。それは、神様との会話なのです。神様に文句を言ってもいいし、「なぜですか⁉」と疑問をぶつけてもいいのです。訴え、思いをぶつけ、ため息を投げかけ、そして、本当の幸せはどこにあるのか、自分は何の目的のために造られたのか、問うていくことを、実は神様も大切にして下さるのです。

箴言3章6節、「つねに主をおぼえてあなたの道を歩け。そうすれば主はあなたの道筋をまっすぐにしてくださる」とあります。目の前の、自分の身の回りのことだけに視野が狭くなりがちな私たちですが、私たち一人一人を造り、時間を超えて私たちの人生をご存知の方に目をあげてみると、

今経験している困難さだけが人生の全てではないことに気がつきます。この経験の意味を神様に問いながら歩みを進めるとき、思いもかけない道筋が与えられ、神様がそれを歩ませて下さる。これは神様からの約束です。

あなたの命を創造された方が、あなたのことを心にかけておられる。道筋をまっすぐにされる。暗闇の中を飛ぶとき、恐れと不安が襲う時、どこへ向かって飛んだらいいのかわからない時、本当の幸せは、私たちの知識や思い込みが示す方向ではなく、神様との対話の中で指し示されていくもの・・・。そのためには、一時、自分が握りしめている人間的な知恵や思い込みを手放す必要があります。人によってそれはお金やプライドかもしれませんし、いつも誰かに好かれていたい、一人でいたくないという欲求かもしれません。しかし、自分の力と思い込みによる判断に頼ることを手放し、計器飛行を始めてみるなら、あなたを大切に思っておられる神は、あなたを大切にして、暗闇の中でも進むべき道を示されます。

私は英語と日本語で聖書を読むフレンドリーグループ、Milk & Honeyをしているのですが、先日集まった学生さんたちと読んだ聖書の箇所があります。それは、You keep track of all my sorrows. You have collected all my tears in your bottle、つまり私たちの悲しみを神様はご存じで、私たちの涙を小瓶に集めてくださっている、というのです。どれほど慰められたことでしょう。神様が私たちの涙を知っておられ、それをないがしろにせず、共に涙を流し、涙のしずくを大切に扱っておられます。私たちが他者から理解されない時、見下されている、あるいは阻害されている、

そんな時も、神がそばにおられ、進む方向があることを示されます。それが聖書のことばです。どうか皆さんの生活の中に、聖書のことばがちりばめられ、大切な宝が増えていきますようにと願ってやみません。

（二〇二四年六月一九日　緑園）

新しい日々に寄せて

マタイによる福音書　七章七～八節

次郎丸　智　希
（音芸准教授）

今年度新任として、伝統あるフェリス女学院大学に就任出来た喜びを胸に、日々を過ごしてきました。作・編曲ゼミを担当し、『文学と音楽』という授業では、クラシック音楽の歴史をたどりながら、人間の「言葉」と「音楽」の、さまざまな形をとりあげました。あらためて自分の専門分野である音楽の多様さ、奥深さに向き合う機会となり、プロテスタントを母体とするこの大学で、このようなテーマで講義できることに、より一層の喜びを感じています。

西洋音楽のもとにあるのは、何と言っても「教会音楽」です。神にささげる言葉は、ただ唱えるだけではなく、グレゴリオ聖歌といった「音楽」と結び合い、人々の祈りと信仰を支えてきました。人間は言葉なしに営みを成立させることはできません。また言葉は音として発せられる以上、何らかの音感とリズムを備えており、その先に音楽があるということは自明であろうと思われます。音

楽は英語で「ミュージック」ですが、この言葉の語源は、古代ギリシア語の「ムーシケー」です。実はこの「ムーシケー」は、音楽を指し示すだけではなく、「詩」「音楽」そして「舞踊」までも包括する大変広い意味を持つものだったようです。すなわち古代ギリシアでは言葉と音楽は、分けてとらえられるものではなく、むしろ緊密に結び合っていたのです。このことからも、いにしえから「言葉」と「音楽」は人間の根幹にかかわるものだったと言えるでしょう。

口に発せられ音にする「言葉」は、キリスト教において最も重要視されるものです。『ヨハネによる福音書』の有名な冒頭「はじめに言葉があった」では、「言葉」がイエス・キリストその人を意味しますが、『創世記』において、神が「光あれ」と言葉を「発した」ことで世界が創られたことと重なり、永遠の昔からイエスはおられたことが示唆されます。言葉を「発する」ということが、世界の創生、救い主の起源につながっている。聖書を読んでいると、日頃何気なく口にする「言葉」の、本来持つ秘めた力を実感します。

『マタイによる福音書』の中の言葉「求めなさい。そうすれば、与えられる。探しなさい。そうすれば、見つかる。門をたたきなさい。そうすれば、開かれる。だれでも、求める者は受け、探す者は見つけ、門をたたく者には開かれる。」は、まさに新参者の私のこの初年を指し示すにふさわしい箇所であり、心に響くものでした。昨年度までの生活とはがらりと変わり、文字通り毎週が新しい挑戦の連続。もちろん聖書においてのこの文章は、信仰の光を求める意味ではありますが、未知なるものを前にした人ならだれにでも、支えになる言葉ではないかとも思います。動けば何かが

開かれる、たいへん背中を押してくれる言葉です。

さて、私は作曲家とピアニスト、そして朗読家として活動をしております。礼拝において聖書朗読は欠かせませんが、私なりにこの聖書部分を、朗読家として少し分析を試みてみます。マタイによる福音書で、この文は「山上の説教」の一つとして挙げられています。イエス様は洗礼を受けられた後、四十日間の荒れ野の修業を経て、悪魔の誘惑に打ち勝ち、ガリラヤで伝道活動を始められました。弟子をとりガリラヤ中を回って、弱い人に寄り添い、病人を癒され、大勢の人々がイエス様に従いました。その群衆を見て、イエス様は山に登られました。そして福音書で3章にもわたる説教が始まります。その最初の部分はこう書かれています。「イエスはこの群衆を見て、山に登られた。腰を下ろされると、弟子たちが近くに寄って来た。そこで、イエスは口を開き、教えられた」。いわゆる地の文ですが、ここからいろいろなことが映像で浮かんできますし想像がふくらみます。天気はどうだったのか、山の上の風は吹いていたのか、おびただしい群衆はどのような様子だったのか。いまのようにマイクがあるわけではありません。息をのんだような静寂がそこにはあったかもしれません。イエス様はどのような声でどのようにお話になったのでしょう。そのように考えていくと、この地の文は、大変詳細にイエス様の動向を記していることがわかります。「腰を下ろされ、弟子たちが近くに寄る」、そこにぐっと集まる期待、集中、その時、「イエスは口を開き、教えられた。」まさに「言葉を発した」のです。「心の貧しい人々は、幸いである。天の国はその人たちのものである。」山上の説教の開口一番はこの言葉です。そこから次々に繰り出されるイエス様の言葉

に人々は驚いたのでした。

２０００年前、ガリラヤの丘で響き渡り空気を震わせたイエス様の言葉が、今同じように空気を震わせている、このことにやはり感動を覚えずにはいられません。言葉はタイムマシンのように、時を超えて、われわれをガリラヤの丘に結び付けてくれます。そして朗読することで、言葉が受け継いできたその重みを確かめることが出来るのです。

さて、イエス様は群衆を前に緊張されたでしょうか？神の子が緊張することはないでしょうか？でもイエス様は人としてお生まれになり、人間の苦しみ・弱さもきっと共有してくださったことと思います。ゲッセマネの園で、弟子たちが寝ている間に孤独を感じていたイエス様を見ると、もしかしたらこの山上の説教においても、何かしらの高揚はお感じになったのではないか、と考えます。そのぐらい、マタイの福音書に記された「山上の説教」の部分は、一種の緊張感と人々の驚きを克明に伝えているように思います。イエス様はその中で、当時ユダヤの人々が求めていた言葉ではなく、信仰において、生き方において本当に大事なことを力強くお話しになっています。イエス様のロゴスから始まったこの世界において、どんなものも神の恩恵をいただけている、ささいな言葉、ささいな気づきにも、光は宿っている。

私個人として、この一年どれだけのことが出来たのか、反省もいろいろありますが、山上の説教に臨まれたイエス様の姿を思い浮かべるとき、その力強さに胸打たれ、私もまた日々感謝しながら、なんとか言葉を「発して」、新しい明日をまた生きよう、挑戦していこうと思えてくるのです。

（二〇〇四年七月一六日　緑園）

わたしに学びなさい

マタイによる福音書　一一章二八～三〇節

秋岡　陽
（学院長）

「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい」。今日の聖書箇所で、イエスはこう呼びかけます。そして「休ませてあげよう」と約束します。イエスの言葉には、やさしさと力強さが満ちています。さらにイエスは、「わたしの軛（くびき）を負い、わたしに学びなさい」と続けます。軛とは、馬や牛などを、馬車や荷車などにつなぐ道具のこと。しかしイエスが言う「軛」は、重荷を一人で負わせるためのものではなく、イエスがともに担ってくれるもの。「わたしの軛は負いやすく、わたしの荷は軽い」と言うように、イエスは、共に歩むための道具としての軛を用意してくれているのです。

私は若い頃、森有正という哲学者の著書を夢中になって読んだことがあります。その人が教えている大学があると聞いて、入学試験を受けに行ったりもしました。彼は「経験」ということを重視

します。ただし、彼の言う「経験」は、私たちが日常的に語る「経験」や「体験」とは少し意味が違います。

私たちは日常生活のなかでさまざまな「体験」をするわけですが、森有正が言う「経験」は、そうした毎日の生活での具体的な出会いや発見のことではなく、私たちが世界と接して生きていくなかで、時間をかけて、しかし確実な実感をもって、その人のなかに結晶してくるものです。それを彼は「経験」と名付けます。

たとえば、今週のチャペルサービスの週間主題は「学ぶということ」ですが、みなさんは教室で授業を受けたり、図書館で本を読んだりして、さまざまなことを学び、発見し、体験しますよね。そうした学びが層をなすようにして積み重なるなかで、やがてみなさんの生き方が変わったり、自分がどういう存在なのかが見えてきたり、自分自身を定義することにつながるなら、そのような生き方の変化こそが「経験」です。

「学ぶということ」については、少し表現は違うのですが、これと似たことが、阿部謹也『自分のなかに歴史をよむ』にも書かれていました。阿部謹也さんは上原専禄という歴史学者の弟子なのですが、自分が学生の頃、上原先生はゼミ生にどんな勉強・研究をしようとしているか尋ねるとき、口癖のようにこう聞いたそうです。「それでいったい何が解ったことになるのですか」。そうしてさらにこうも言った、と書かれていました。「解るということはそれによって自分が変わるということでしょう」。学ぶということは、何かが理解できればおわるのではない。それによって自分が変

わるような学びをすることが大事。森有正の「経験」に通じるものを、阿部謹也の本を読みながら思ったことでした。

今日の聖書箇所で、イエスは「わたしに学びなさい」と語っています。これもまた単なる知識の増加を求めるものではありません。イエスの言葉や行い、そしてその生き様に照らして、自分の生き方を見直し、自己を再定義することを指しています。しかも、そのようにイエスに学ぶことで、私たちは安らぎを得ることができる、とさえ約束しています。

さて、今日の聖書箇所に「疲れた者、重荷を負う者」という表現がありました。現代では「精神的・肉体的に疲れ、重い負担を感じて生きる人」という意味にとるのが一般的です。しかし、イエスがこの言葉を語った当時は、また別の特別な意味も持ちました。

当時、ユダヤ教の律法学者やファリサイ派の人々は「律法」とよばれる戒律で、がんじがらめでした。守るべき律法の数は、数えると六〇〇以上になります。そのうち半数以上は「……してはいけない」という律法。残りが「……しなければいけない」という律法。そして、律法をすべてきちんとまもらないと、神様はよしとしてくださらない、と考えられました。「疲れた者、重荷を負う者」という言葉は、そうした、律法でがんじがらめになった人々のこともさしていたと考えられます。

その話を聞いて、へえ、昔の人は大変だったんだね、と片付けられないものがあります。というのも、現代の日本に住む私たちも、「……してはいけない」「……しなければいけない」というプレッシャーの中で生きているからです。

学生の皆さんの場合で言えば、親からの意見や価値観のおしつけ、教師からの期待や指導、友人からの忠告や様々な視線……。さらに、自分自身が課すプレッシャーが加わります。これらを数えたら六〇〇くらいあるかもしれません。そんな重荷のなかで、疲れきってしまう人も出てきます。

しかし、そんな私たちにも、イエスはこう言います。「だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう」と。

人生には様々な重荷があります。個人的な重荷もあるでしょう。また、社会全体で取り組むべき困難な課題もあります。

しかしイエスのもとで支えられて歩むとき、その軛も負いやすくなる、というのです。イエスに学び、生き方を変えられたとき、その軛も負いやすくなる、というのです。

イエスの軛は、私たちに一人で背負わせるためのものではありません。イエス自身が共に担ってくださる軛です。「疲れた者、重荷を負う者」にとっても、その「軛は負いやすく」「荷は軽い」。それは、イエスが共に担い、寄り添ってくださるからです。

私たち一人ひとりは小さく、弱い存在です。自分の力だけで一人で生きていけ、と放り出されても生きていけません。そうしたなか、自分といつも寄り添って歩いてくれる、という信頼関係をイエスとの間に築けたなら、また、神様とのあいだに築けたなら、そのとき私達は本当の「安らぎ」を得ることができる。イエスに学び、いままた新しく生き方を見直すことのできる私たちになりたいと思います。

イエス・キリストが語る「わたしに学びなさい」という言葉を心に刻みたいと思います。どうか、イエスに学ぶことを通して私たち一人ひとりが変わり、新しい生き方を見出せますように。主イエス・キリストの御名によって祈ります。

（二〇二四年七月二二日　緑園）

「出エジプト記」で祝福されたのは モーゼだけなのか？
～『十戒』（セシル・デミル監督、１９５６年）を学び捨てる～

出エジプト　一章一九節

藤　巻　光　浩
（メディア・レトリック研究）

私はいつも、キリスト教信仰に関係する映画作品の紹介をしています。今回は、ハリウッド映画史の中で登場した「聖書映画」について話します。そんなジャンルがあるのかを驚かれた人もいるかもしれませんが、かなり人気のジャンルだったんです。

その中でも、本日は、セシル・デミル監督による作品『十戒』に着目してみたいと思います。この作品は１９２３年に上映されたのですが、まだ音声がついていないサイレントのものでしたし尺

も短かったので、56年にリメイクされました。

このリメイク作品の中で、しばしば言及されるのが、主人公のモーゼが主の力をまとった時に光る髪の毛の視覚的処理と、海が2つに裂けるスペクタクルな表現方法です。あとは、若き日のユル・ブリンナーの姿を見ることもできます。

この作品が依拠する「出エジプト記」は、何度も映画のモチーフとなってきました。ディズニーアニメでも取り上げられたほどです（『プリンス・オブ・エジプト』、１９９８年）。この話はアメリカでは大人気なのです。なぜ、アメリカで人気があるのでしょうか？この問いには、歴史的は背景があります。

「出エジプト記」はアメリカの建国の歴史観と深く結びついているために、何度も映画モチーフに選ばれてきたのです。カート・アンダーセンによる『ファンタジーランド――狂気と幻想のアメリカ５００年史』（２０１７年、東洋経済新聞社）でも説明されています。アンダーセンによると、ピューリタンたちは宗教的に腐敗したヨーロッパではなく、新しいイギリスである「ニューイングランド」に、新しい「エルサレム」を作ろうとしたというのです。

自分たちの信仰を貫くために、大海を渡り、目的地であるイスラエル――つまりピューリタンにとっての新天地「アメリカ」にたどり着いたという歴史観が、「出エジプト記」と一致したということなんです。艱難辛苦乗り越え、理想郷としての信仰の地にたどり着き、異教徒であるエジプト人をやっつけた話とリンクするのです。「出エジプト記」は、ピューリタンの気持ちを受けついだ

現代アメリカ人クリスチャンの気持ちにぴったりなのです。ですから、リーダーであったモーゼを称賛する話だけが注目され、繰り返し映画のモチーフとして利用されてきたのです。

私は、この解釈の方法は、好戦的な側面だけに焦点を当て過ぎであると思うし、あまりに断片的ではないかと思うのです。また、聖書の教えを短絡的に解釈した話に思えてきてしまうのです。

モーゼは、エジプトにおいて、何度も命を落としそうになった人物です。特に、赤子の時は、生まれるとすぐに殺されそうになってしまいます。しかし、モーゼは、多くの人たちに救われます。とりわけここで、女性たちが果たした役割が非常に大きかったのです。

川に流されたモーゼを救いだした女性もいますし、モーゼを育てた女性もいます。モーゼが赤ちゃんの時、これらの女性たちに救われなかったら、エルサレムへと脱出することなどできなかったわけです。また、この女性たちに加え、エジプト人の助産師たちの役割も非常に大きかったと言えるでしょう。エジプトの王が、「生まれてきた男の子をすべて殺せ」と命令したことを考えれば、モーゼを逃がした助産師たちには命の危険もあったことでしょう。しかし、彼女たちは機転を利かせて、モーゼを救ったのです。その部分は、こんな風に記されています。

助産婦たちはファラオに答えた。「ヘブル人の女はエジプト人の女とは違います。彼女たちは元気で、助産婦たちが行く前に産んでしまうのです。」（出エジプト記　第一章一九節）

殺す命令が下っていても、勇気と知恵を振り絞り機転を利かせ、とにかく命を守ろうとしたことが記されています。たとえ、その赤子がエジプト人にとっての異教徒であっても、です。「出エジプト記」は、決して、マッチョで好戦的なだけのお話ではないのです。

『旧約聖書』のみならず、聖書の多くのお話は、様々なお話を寄せ集めてできています。そのため、一貫性がないように見えることもあります。それは信仰告白の書であるために、現代人の常識を使うべきではないのかもしれませんが、要は主がどのような人々を祝福したのか、注意して読むべきだと思うのです。ですから、ハリウッド映画みたいに、勇ましいマッチョなモーゼの話だけを取り出して、教訓めいたものを引き出すのではなく、聖書を丁寧に読み、そこから何かを学び取る姿勢が必要であると思うのです。一部だけを取り出して、大衆向け、つまりノン・クリスチャンに向かって物語を作り上げる作業は、聖書自体を裏切っているような気がしてなりません。

「出エジプト記」は、民族や信仰の差異に関わらず命を大切にすることの大切さを訴えています。しかも、モーゼの命を守った女性たちには、主の祝福が与えられています。エジプト人であってもヘブライ人であっても、小さな命を大切にする心を持っていたことや、それを主が祝福したことが記されているのです。

もしみなさんが、この作品に興味を持ったら、元の聖書を読んでみてください。きっと映画とは異なる魅力を発見することができるでしょう。ハリウッド映画の中では忘れ去られる話も、聖書から学ぶ姿勢を忘れなければ、女性たちが祝福される場面に気が付くはずです。映画作品は、聖書を

学ぶ入口にしか過ぎません。もしかしたら、制作された時代や地域の社会通念を反映することで、大事な部分を見落とすこともあるでしょう。それだけに、映画を観て聖書の中身を知った気になることなく、聖書自体を読む必要があるのです。

祈祷：全能なる主よ、み名を賛美します。本日、聖書映画だけでなく、キリスト教徒とユダヤ教徒とイスラム教徒が共有する「出エジプト記」を読む機会を頂いたことに感謝します。１９４８年から現在に続く、イスラエルによるパレスチナ人への無差別攻撃は本当に許しがたいものがあります。どうか、現代イスラエルの人たちが、トーラーを丁寧に読み解き、命を守ることの大切さに目覚めることができますように、そして、全世界の人を殺す兵器使用に決定権を持つ政治家たちが、一人ひとりの命を大切にすることができるように、主の御心にかなう働きや思いを持つことができますように、お導きください。

父と子と聖霊のみ名によって　†　アーメン

（二〇二四年七月二五日　緑園）

「自由意志って本当にあるの？」

ヨハネによる福音書　八章三一―三二節

荒井　真
（比較法学）

今週の週間テーマは自由です。私たちは自由に生きたいと思っていますし、日本国憲法でも基本的人権の重要な部分として、思想及び良心の自由、信教の自由、集会、結社及び言論、出版その他一切の表現の自由、居住、移転及び職業選択の自由、学問の自由等を規定しています。

私たちは、自分の自由な意思に従って物事を決定したいと願っていますが、私たちには本当の意味での自由意思というものをもっているのでしょうか。

ルネサンスのフィレンツェなどで活躍したピコ・デラ・ミランドラという学者は、『人間の尊厳について』という書物の中で、人間には神から自由意思が与えられており、その人自身の決定によって「獣に退化することもできるし、神的なものである天使に生まれ変わることもできる」と述べています。そして、この自由意思こそが人間に尊厳を与えるものだと考えているのです。

キリスト教では、人間に自由意思が存在するという考え方もありますし、逆に人間の行動はあら

かじめ神により計画されており、自由意思はないという考え方もあります。これに関する議論はとてもややこしいので今回はお話ししません。どちらが正しいのか私には分かりませんが、私としては、人間に自由意思があると考えたいと思います。そうでないと、もし私たちが悪いことをするとすれば、それは神様があらかじめ計画したものとなってしまうからです。

しかしそれにしても、現代社会を生きる私たちには、純粋な意味での「自由意思」というものがあるのでしょうか？私たちが今考えていること、決定していることは、純粋な自分の意思だと言い切れるでしょうか。私は疑問に思います。

なぜなら、私たちは生まれた国や地域、産み育てた親、受けた教育などによって小さいときから様々な価値観を刷り込まれているからです。また、周りの目を気にしなければならないのが私たちの実情です。自分がしたいこと、やりたいことがあったとしても、親や友達や社会が反発すると思うと、怖くなったり、面倒くさくなったりして、周りに合わせてしまうこともよくあります。したがって、私たちには自分が考えていること願っていることが本当に自由な意思から生じたものなのか分かりませんし、その意思を完全に実行することができるかも分かりません。

しかし、そのような限定があろうとも、できるだけ自分らしくありたい、自分の自由な意思を実現したいと私たちは願っているのではないでしょうか。

さて、自由について考えた現代の法哲学者にジョン・ロールズという人がいます。『正義論』という分厚い本を書いたのですが、彼はその本の中で面白い思考実験を行います。その思考実験は「無

知のベール」という名前で呼ばれていますが、次のようなものです。

まず人々は、目隠しに覆われていて、自分の年齢や性別、地位、財産、能力、生まれる場所についてまったく知らされていない状態にあると想定します。この目隠しのことを「無知のベール」と呼びます。そして、そのような状況の中で、あるべき社会のルールについて議論します。そうすれば、人々は自分がもっとも不自由で貧しくて苛酷な状況に陥らないように、自由で公正な社会を作ることで一致するというのです。

もし、古代エジプトのように王様は絶対権力をにぎっているけれど、人民のほとんどが奴隷のような状態にある社会を作ってしまうと、王様になれればいいですが、奴隷になったら悲惨です。独裁国家を作ってしまうと、独裁者に迫害されて強制収容所に入れられる側になるかもしれません。貧富の差が激しい国を作ってしまうと、金持ちとなればいいですが、寝る家も食べるものもないような貧しい者となってしまう危険があります。

このように考えていけば、最も賢明なのは、自分が社会の中で最も不自由で不利な状況となることを想定して、弱い人々が他の人々のための犠牲とならない社会を作ることです。そうすれば、どのような状況に生まれても自分が他の人々よりも不自由になりませんし、大きな格差に悩むこともないでしょう。

実際、ロールズは、人々の自由を守りつつも、最も不利な状況にある人々の利益を最大化することを主張しています。ロールズのこの考えは、富裕層から多くの税金を取り（累進課税）、それを

生活に困った人々のために使う生活保護の理論的支柱として機能しています。さらにロールズは、才能というものは偶然に与えられたものであるから、自分のためではなく、社会のために用いなければならないと言っています。才能は社会の共有財産なのです。

私たちには、社会により限定されはしますが、神様から自由意思を与えられています。（私はそう考えています。）そして、それぞれに神様から与えられた賜物（タレントという言葉は、元々「神様から与えられた賜物」という意味をもっており、それは莫大な金額や量を意味する「タラントン」という聖書の言葉に由来しています）があります。それをどのように用いるかは私たち次第です。そして私は、その自由意思を社会がもっと自由となり、もっと格差がなくなるために用いたいと願っています。なぜならば、聖書が示すとおり、イエス・キリストは当時の社会で最も貧しく、最も弱っていて、最も虐げられている人々のために働いたからです。旧約聖書と新約聖書を通して、繰り返し強調されていることは、貧しい人々、差別されている人々、困難の中にある人々のために行動しなさいということです。

戦争や災害などの暗いニュースが続く毎日ですが、人々がそして皆さんが生まれて来て良かったと思えるような社会にするために、皆さんの自由意思や才能を用いて欲しいと思います。

祈り：天にまします主なる神様、この礼拝を感謝いたします。私たちにはあなたから与えられた自由意思と賜物があります。それをあなたの良き業のために用いることができるようにして下さい。この祈りを主イエス・キリストの御名を通して御前にお捧

げいたします。アーメン。

（二〇二四年十月一八日　緑園）

「宗教改革とエキュメニズム」

ガラテヤの信徒への手紙　三章二六～二八節

藤　原　佐和子
（キリスト教学）

私は、７つのプロテスタントの教会と多くのキリスト教系団体が加盟する日本キリスト教協議会（ＮＣＣ）の働きにかかわっています。ＮＣＣは、「今この時に、神は私たちに何を求めておられるか」について教派を超えて共に考え、行動しようとするエキュメニカル運動の調整役を担うものです。このような協議会は世界各国にあり、国内の運動のハブとして機能すると同時に、地域レベル、世界レベルでも、教派を超えたつながりを支えています。

この運動はよく「教会の一致」を目指す運動だと言われますが、私の理解では少し違います。どの教派に連なっていても、キリスト者は皆、ただ一人の神、キリスト、一つの聖霊、洗礼を分かち合っています。その意味で、「キリストにおいて一つ」という「教会の一致」は、人間が努力によって獲得しようとするものではなく、すでに神から与えられているものと言えます。エキュメニカル

運動とは、私たちの間にすでに与えられている一致（しかしながら、人間の罪のために見えなくされている一致）を神の助けによって、少しずつ再発見していこうとする信仰運動です。そして、他ならぬキリスト・イエスご自身が「すべての人を一つにしてください」と祈っているということも、心に留めたいと思います。

20世紀に始まるエキュメニカル運動は宣教と伝道、神学、社会倫理の働きなど、幅広い関心を持つものです。今日では人種差別や性差別の問題から、人種的・民族的マイノリティ、先住民、障がい者、移民、難民の尊厳と権利、核兵器の廃絶、宗教間対話までその関心領域は多岐にわたりますが、一言で言えば、エキュメニズムの最大の特徴は、「分断の問題に取り組む」という点にあります。世界には様々な分断がありますが、キリストを主と告白する教会もまた例外ではありません。私たちは自分たちの教会を指してわりと簡単に「キリスト教」という言葉を使いますが、厳密に言えば、キリスト教はローマ・カトリック教会、正教会、プロテスタントから構成されていますし、プロテスタントも諸教会に分かれていますので、その中身はきわめて多様です。世界宣教の時代には、宣教師たちは互いに競合するライバルでした。そして、歴史を遡って見るならば、ローマ・カトリック教会とルター派との間に深刻で決定的な分断をもたらしたのは、「宗教改革」に他なりません。16世紀の宗教改革者たちの意図したことではなかったとしても、「宗教改革」は西方教会の一致を壊すことになりました。

それでは今日、宗教改革を私たちはどのように記念したらよいのでしょうか。私たちが招かれて

いるのはもちろん、中世の時代のカトリック教会に対する非難ではありません。思い起こしたいのは、宗教改革運動のモットーが「教会は絶えず改革し続ける」という謙遜の呼びかけであったという点です。例えば、ルター派の教会では、現在でもルターの生涯、ルターの言葉、ルターの神学が折りに触れて強調されますが、それはルターを絶対視することとイコールではありません。彼の言葉を吟味して、必要に応じて退けることもあるのです。例えば、ルターは人種差別的な視点を持ち、奴隷制を許容してきたと指摘されていますが、今日の教会はそのような差別的態度を受け入れません。また、ルターは反ユダヤ主義的な文書を書いて、ユダヤ人を攻撃し、差別を煽動したことさえありますが、世界のルーテル教会は１９８４年にこれを受け入れないことを正式に決めています。これらの点を踏まえ、私は宗教改革が「教会は絶えず改革し続ける」というメッセージを持つものである点を、皆様と記念できるのではないかと思います。

それでは、宗教改革では何が教会を分断したのでしょうか。その要因は様々ありますが、両教会は「イエス・キリストの福音をどう理解するか」という点、すなわち「義認」と呼ばれる教理の理解において分裂したと考えられています。ルター派は、神の恵みによる、キリストのゆえの、罪の赦し、救いは「信仰によって受けるものなのだ」ということを『アウグスブルク信仰告白』で主張しました。これに対し、カトリック教会はトリエント公会議を通してこれに応じ、ルターを破門にしました。互いの文書を燃やすなど、激しく、醜い争いがありました。その意味で、（ルター派の神学者である徳善義和牧師の言葉によれば）宗教改革は「義認」をめぐる意見の対立をもとに、「相

互に斥けあい、断罪し合うという４００年以上にわたる歴史の始まり」です。そして驚くべきは、そのようにして示された両教会の立場が「２０世紀に至るまでその妥当性を持ち続けてきた」という点です。その結果、カトリックとプロテスタントの分裂と対立は固定化され、相互の無関心まで生じていきました。

両教会の関係性に変化がもたらされたのは、１９６０年代に開かれた第二バチカン公会議です。それまでのカトリック教会でも「教会の一致」は願われてきましたが、それは、（正しきに帰ると書く）「帰正」と言って、不幸にもカトリック教会から離れていってしまった人々が、唯一の、普遍的、使徒的教会であるカトリックに戻ってくること、という意味で考えられてきました。しかし、第二バチカン公会議を経て、カトリック教会は、自らを「途上の存在」として捉えるようになります。したがって、カトリック教会もまた、「改革され続けなければならない」として、一致、エキュメニズムに対して前向きな姿勢を示すようになりました。

その後の様々な対話の試みの中でも、宗教改革記念日に特に思い起こしておきたいのは、30年以上にわたるエキュメニカルな神学的対話の歴史を経て、カトリックとルーテルが１９９９年に正式に署名した「義認の教理に関する共同宣言」です。宗教改革以来、両教会は「義認」をめぐって最も深刻に対立してきましたが、互いの理解についての詳細な研究、聖書に遡る共同研究を経て、「16世紀に互いに交わし合った『断罪』はもはや当てはまらない」ということを宣言することができました。

そして、この「義認の教理に関する共同宣言」は、単にルーテルとカトリックの間の出来事と見なされるのではなく、教派を超えて大切に受け止められていきました。２００６年には世界のメソジスト教会が、２０１７年には世界の改革教会が、この共同宣言を我が事として受け入れました。アングリカン・コミュニオンと呼ばれる全世界の聖公会も、２０１６年にその内容を「歓迎し、支持する」と表明しています。「教会は絶えず改革し続ける」というメッセージの通り、長い年月をかけて、諸教会の関係性は作り変えられてきたのです。

それでは今とこれから、教会はどのように改革され続けることができるでしょうか。身近な例を挙げますと、ＮＣＣでは今年3月に「ジェンダー正義に関する基本方針」の採択という新しい試みが行われました。足掛け4年の大仕事です。ジェンダーやセクシュアリティを理由とするあらゆる暴力、差別、排除に抵抗し、一人ひとりが神の像に作られた尊厳ある大切な人間なのだということを示す「ジェンダー正義」もまた、「神の正義」の欠くべからざる一部分なのだという認識は、10年ほど前から、世界の教会で共有され、公に宣言されるようになっています。私は仲間たちとともにこの「基本方針」を準備する役割を与えられたのですが、当初は、本当にそんなことができるのだろうかと不安でした。率直に言えば、教会は本当に変わっていけるのかということが心配だったのです。

ですが、様々な教会からパワフルな仲間が集まり、そこからさらに人の輪が広がりました。アジアのいくつかのＮＣＣにも助けていただきながら、若い世代からの声、加盟教会・団体からの意見

をふんだんに取り入れた基本方針が出来上がりました。これが実際に採択された時、私は、キリスト教研究にかかわっておきながら今更なのですが、「神は存在する」と直感しました。エキュメニカルにつながれば、一人では決してできないようなことができるようになると知ったからです。それから、私は「現在進行形の『宗教改革』は存在する」とも思い知らされました。教派を超えてつながれば、一つひとつの教会では始めにくいことでも始められるようになるということを、初めて体験できたからです。エキュメニカルな連帯の興味深いところは、今それぞれの教会がどのようであるかという現状でつながるのではなく、今とこれから、どのような教会へと刷新されていくように神から招かれているのか、という「ヴィジョン」でつながるのだという点です。

教会と社会には課題が多く、また、一人ひとりの時間や労力、意欲や関心には限りがあります。イエスの語る「神の国」のヴィジョンを、本当にリアルなものとして思い描くことが難しい時もあります。それでも、私たちが様々な場所で少しずつ担う働きが、信仰者の集合的努力を形作るのであって、そのような働きの限界のその先に、働いていてくださる神に信頼することが、今とこれからの絶えざる改革の鍵になるものと信じます。

（二〇二四年十月二八日　緑園）

「宗教改革がめざす未来」

エフェソの信徒への手紙　一章一五～一八節

相澤　一
（宗教主事）

今週（このメッセージは二〇二四年一一月一日に行われました）の週間主題は「宗教改革」です。一五一七年一〇月三一日に、マルティン・ルターがヴィッテンベルク教会に九五箇条の提題という文書を掲示したのが、宗教改革運動の始まりとみなされますので、カトリックでは一〇月三一日はハロウィンですが、プロテスタント教会では宗教改革記念日として記念されます。

ところで、「宗教」改革といいますが、ルターは宗教一般や宗教全般を改革しようとしたわけではありません。彼は当時のローマ・カトリック教会で行われていた贖宥状（いわゆる免罪符）販売について再考を求めただけでした。しかし、その問題提起がカトリック教会そのものに対する批判と受け取られて騒ぎが大きくなってしまい、それがどんどん大きな運動となり、プロテスタントという新しいキリスト教が、カトリックから分かれて新しく誕生することになったのです。

しかし、ルターはもともとそんなことはまったく意図していませんでした。ルターはただ、「今のカトリックは聖書やイエス・キリストが教えていることから外れてしまっているのではないですか？　少し軌道修正しましょう」と言っただけで、カトリックから分裂して新しいキリスト教を作ろうなどということは、まったく考えていなかったのです。しかし、結果的にプロテスタントという、カトリックとは違う新しいキリスト教が、カトリックから分かれて生まれることになってしまいました。

その後、ジャン・カルヴァンが、スイスで宗教改革運動を始めましたが、当初はルターたちと一緒にやっていくつもりでした。しかし、教会の職制や聖餐理解を巡って意見の食い違いがあり、「自分が目指すものはルターとは違う」ということになり、ルターたちのルター派とは別の、改革派という教派ができることになりました。

さらに、イギリスにもフランスにも、ヨーロッパのあちこちに宗教改革運動が広がっていきましたが、各地で、ルターに始まるルター派、カルヴァンに始まる改革派とは別に、イギリスでは聖公会が生まれ、さらに聖公会からわかれたメソジストが生まれ、ほかにもピューリタン運動やバプテストなど、プロテスタントの中にたくさんの教派が生まれました。

このように振り返ると、宗教改革とプロテスタントの歴史は、分裂の歴史でもありました。宗教改革運動の発端となったルターは、「今カトリックがやっていることは、聖書やイエス・キリストの言葉に照らすと、ちょっとおかしくなっている。だからキリスト教と教会の原点に戻りましょう」

と主張しただけだったのですが、結果的にカトリック教会から分裂することになってしまいました。そして、キリスト教の原点に戻ることを主張したのは、カルヴァンも同じでした。彼は、聖書の教えに忠実な教会をやりたいと思った結果、ルターたちとは袂を分かつこととなったのです。

「歴史は繰り返す」といいますが、その後、誰かが「聖書の教えに還ろう」、「イエス・キリストの教えに還ろう」と主張するたびに、分裂が繰り返されてきました。聖書の教えやイエス・キリストの教えは、本来はキリスト教の「原点」のはずですから、そこに戻れば分裂が克服されて一つになるはずです。実際には分裂が繰り返されてきたのです。

二〇世紀になると、エキュメニカル運動という運動が起こりました。月曜日にお話しくださった先生がエキュメニカル運動についてお話しされましたが、日本語では「教会一致運動」と翻訳されます。簡単に言うと、「いろいろな教会がありますけど、みんな一つになりましょう」という運動ですが、現実にはなかなかうまく行っていません。逆に、エキュメニカル運動を巡って、さらに分裂が起こっているというのが、残念ながら現状です。

たとえば、カトリックとプロテスタントが、お互いに歩み寄って一つになろうとしたら、どんなことが起こるか考えてみましょう。先ほど少し触れましたが、カトリックはハロウィンのお祭りをしますが、プロテスタントはしません。では、カトリックとプロテスタントが歩み寄って一つになるとしたら、カトリックがハロウィンを止めることになるのでしょうか、それとも、プロテスタントもハロウィンのお祭りをしてお祝いすることになるのでしょうか？

また、カトリックにはマリア崇拝の習慣がありますが、プロテスタントにはありません。カトリックとプロテスタントが歩み寄って一つになるとしたら、カトリックがマリア崇拝を止めることになるのでしょうか、それとも、プロテスタントもマリア崇拝をすることになるのでしょうか？　こういう、お互いのアイデンティティがかかっているがゆえに、そう簡単には譲れないし、一緒にもなれない事柄がたくさんあるのです。

今日のお話しの題名は「宗教改革がめざす未来」とさせていただきましたが、それはいったいどんなものでしょうか？　もちろん、多くの教派や分派に分裂してしまったキリスト教会がまた一つになれるならば、それはすばらしいことです。しかし現実には、一つになろうと言い、一つになることを目指しながら、実際には分裂をし続けたのが歴史の現実です。あるいは、将来はもっともっと分裂が広がっていくのでしょうか？

今日の聖書箇所に、「わたしも、あなたがたが主イエスを信じ、すべての聖なる者たちを愛していることを聞き、祈りの度に、あなたがたのことを思い起こし、絶えず感謝しています」とあります。この、「すべての聖なる者たちを愛している」という言葉は、どの注解書を開いても特に解説がなかったのですが、とても重要な言葉です。「聖なる者たち」というのは、クリスチャンたちのことを指しています。エキュメニカル運動もいいでしょう。しかしすべての運動に先立って、違う教派や教会の人たちであっても、みんな「愛する」ということが、あらゆる一致運動に先立って重

要なのです。

たとえば、カトリックとプロテスタントが、組織として一つになるのは難しいですし、将来的にもおそらく不可能でしょう。しかしだからといって、カトリック教会の信者さんとプロテスタント教会の信者さんが仲良くできないわけではありません。

たとえば、日本と韓国のあいだには政治的に難しい問題があり、国同士が仲良くなるのは簡単ではありません。しかし、日本人と韓国人が仲良くなることはできますし、現に仲良くしている人たちはたくさんいます。それと同じで、個人レベルやグループレベルでプロテスタントとカトリックが交流したり仲良くしたりすることはできますし、現にそうしている人たちはたくさんいらっしゃるのです。

思うに、このフェリスのチャペルは、いろいろな宗派や教派に所属しているクリスチャンたちが交流する実験場かラボのようなものだと言えます。このチャペルサービスには、いろいろなキリスト教のバックグランドを持った人たちが協力してくださっています。個人的には、何も教派的な制限は設けず、各人が自分のお持ちのものを持ち寄ってくだされば、いいと考えています。

もしかしたら、宗教改革がめざす未来は、このフェリスのチャペルサービスで、いち早く実現するかもしれません。ですから、このチャペルサービスは、宗教改革が目めざす未来を「チラ見」できる時間だとも思えます。このチャペルの外では、キリスト教はいろいろな教会や教派に分裂していて、なかなか一つになれないままです。しかし、このチャペルの中では、いろいろな教会や教派

の人たちが協力しあって、一つのチャペルサービスを作り上げるということが起こっているのです。このラボ的な取り組みがなされている場所から、何が生まれてくるのでしょうか？　みなさん、どうぞ期待してチャペルサービスに足を運んでいただければと思います。

（二〇二四年一一月一日）

奇跡という希望

ヨハネによる福音書　一一章三八～四三節

K・R

今日の聖書の箇所は有名なラザロの復活の場面です。17世紀のオランダの画家レンブラントが、この場面をいくつかの作品に描いていることを知っている人は多いでしょう。

聖書には、この他にも、イエスが数多くの奇跡を起こしたことが書かれています。水瓶に入った水を葡萄酒に変えたとか、五つのパンと二匹の魚を増やし五千人の人々に食べさせたとか、十二年間出血が止まらず苦しんでいた女が、後ろからイエスに近づきイエスの服の房に触れた途端、出血が癒えたとか、多くの奇跡が記されています。

イエスがこの世にあった時、ごく短い間に注目を集め、救いを求める人びとにとっての崇めの対象となったことの背景に、イエスがあらわした数々の奇跡の業があったことは間違いない。そのような数々の奇跡の頂点に、イエス自身の死からのよみがえりがあり、キリスト教の信仰の核となっ

ているわけです。

ところが、現代では、聖書の語る奇跡は、頭を悩ませる問題です。啓蒙の時代を経て、人間の理性、科学が特権的な地位を得る世界では、イエスが死後4日たったラザロをよみがえらせるという話は、とても信じがたい。特に日本人にとって、奇跡の物語は、キリスト教のとっつきにくさの一大要因になっているように思います。

19世紀以来、聖書の科学的な分析が進む中で、奇跡物語は、象徴的なものとして理解されることが増えたと思います。つまり、未だ科学が発達していない、イエスの時代の人びとには奇跡と見えた現象が、伝えられる中で、誇張され、イエスの力を示すものとして象徴化され、定着した、といった理解です。

カトリックでは、聖人崇拝の中に奇跡への信心が残って（生きて）いるということを最近学びました。教皇の裁量もありますが、現代では、列福されるには1つ、列聖されるにはさらに1つ、その人が奇跡を起こした（死んだ後で可）証明が必要だそうです。そして、認められる奇跡の大部分は病からの回復です。プロテスタントには聖人はいませんから、奇跡物語が信仰の中に息づく余地はより狭くなる。だから、奇跡は扱いにくい。私は、そういうプロテスタントの中で育ちましたから、奇跡の話は、あまり聞いたことがありません。

ところが、最近、「奇跡」に出会ったというか、「奇跡」と思える不思議を目撃する機会がありました。

私の友達の話です。彼女が40代のとき、夫がくも膜下出血で倒れました。一命は取り留め、意識は戻りましたが、前頭葉機能不全となり、話すこともできないような状況になったと当時聞きました。彼女は働きながら、そんな夫の面倒を辛抱強くみていました。そして、40代の末に、夫を連れてニューヨークに行き、高次脳機能障害の機能回復訓練プログラムを持つ研究所に通いました。夫はそのプログラムを通じ、かなりの機能を取り戻したということでした。

私がその夫婦に直接会ったのは、ニューヨークから帰国した後のことです。当時、私の友達は、一人での留守番が困難な夫を、できるときには職場に連れて行っていました。友人同士で会うときにも連れてきました。私は何度か彼に会いましたが、彼はどこかぼんやりしていました。尋ねれば答えるけれど、周囲の状況をはっきり認識していないようでした。もちろん、妻の友人を覚えるなどということはとてもできない様子でした。

少し前に、友達が集まる小さな食事会がありました。彼女は例によって、夫を連れてきました。最初は気づかなかったのですが、あれこれ会話が始まって、えっと思いました。友人の夫の目が覚醒しているのです。そして、積極的に会話についてきて、質問までするのです。思わず「何か、すごく元気になられましたね。」と言うと、「私が元気でなかった頃をご存知ですか。」と返して来ました。

私の友達は、定年後、ある公的な協会に所属し、日本全国各地を回り、政府補助金が適正に使われているか、査定する仕事を始めました。夫を一人で家に置いておけないので、連れ回っています。

あちこち訪ね歩く中で、地方で働く昔の夫の同僚に2度ほど、偶然会ったというのです。

夫は、昔の同僚を認識できました。そして、話すうちに、夫の脳は活性化し、失われていた昔の記憶と、倒れて意識が戻った以降の記憶が突如としてつながったらしいのです。友人は夫といっしょにニューヨークで脳のリハビリを経験しました。その彼女が、そういうことは、時々起こるけれど、どういうメカニズムで起こるかは不明で、全く神秘的な現象だと説明しました。そう、言葉を変えれば、「奇跡」です。

この不思議が起こるまで、私の友人はほぼ20年にわたり、苦闘しました。ほとんど「息子」と化した夫を支え続けただけでなく、自分の老いた母親を看取り、夫の両親の面倒を必要に応じてみてきました。「あなたの愛がなければ、奇跡はなかったね」とメールすると「夫は私に依存症。重すぎる。愛は容易に憎悪にかわる」と返事がありました。その愛憎の長い年月が思いやられました。不思議な奇跡は、辛抱に辛抱を重ねたあげくに、あったのです。イエスの奇跡――多くが病の癒やしです――も長年の煩いの果てにあったことを思い出しました。苦難の果ての奇跡はある。苦しみの中にある者の希望です。と同時に、奇跡が起こって、それで話は終わりでないことにも気づかされました。

ラザロは蘇った後、どうなったでしょうか。私の友達は、覚醒した夫と今後どのように生きていくでしょうか。谷川俊太郎の「そのあと」という詩が思い出されます。

そのあとがある
大切なひとを失ったあと
もうあとはないと思ったあと
すべて終わったと知ったあとにも
終わらないそのあとがある

そのあとは一筋に
霧の中へ消えている
そのあとは限りなく
青くひろがっている

そのあとがある
世界に　そして
ひとりひとりの心に

奇跡の出来事にも、「そのあと」があるはずです。それは必ずしも順風満帆ではないかもしれません。ただ、その出来事は、「ひとりひとりの心」に勇気を与えるものなのでしょう。神の御業は

人知を超えている。ということは、「そのあと」も、私達にはわからないけれども、神よって意味づけられている。そう考えれば、何が起こっても怖くはありません。

もうすぐクリスマスです。クリスマスには特別なプレゼントをしますよね。いつもとは違う、楽しい一時を演出しようとしたりします。年に一度だけ、困っている人にプレゼントしても、貧困問題の解決にはつながらないかもしれません。ディケンズの「クリスマス・キャロル」では、吝嗇家の老人スクルージが、クリスマスの朝、生まれ変わったように、気前の良い人になります。でも、「そのあと」もスクルージはずっと気前が良かったのでしょうか。もしかすると、あのクリスマス一回だけのことだったかもしれません。良くても普段はドケチのままで、クリスマスの日だけ気前がよくなったのかもしれない。私はそんなふうに想像します。

しかし、それでもよい。クリスマスは、人間が神の奇跡の真似を年に一度行って、神の御業に想いを馳せる。そして、翌年までの勇気をもらう、そういう日なのではないでしょうか。

（二〇二四年一一月二七日　緑園）

「話しかけられたので…」

ヨハネによる福音書　四章六～一四節、二七～三〇節

和寺悠佳
（キリスト教学）

イエス・キリストはサマリアで、一人の女性に出会いました。ユダヤ人であるイエス・キリストが、サマリア人の女性に声をかけることは、当時の常識では考えられないことでしたが、イエス・キリストは、サマリア人の女性に言ったのです、「水を飲ませてください」と。

この女性が井戸に水を汲みに来たのは、正午ごろ。一日の内でも最も暑い時間帯でした。多くの人が水を汲みに来る朝や夕方という涼しい時間帯ではなく、暑い時間帯に水を汲みに来なければならなかったとは、この女性が皆の輪の中に入れなかったということを意味しています。

イエス・キリストは、喉が渇いていて、どうしても水が飲みたかったのでしょう。しかし、サマリア人の女性に声をかけた理由は、それだけではないようです。十節以降で、イエス・キリストは水を飲むことなどなく、この女性と「水」をめぐって対話をしています。この対話はかなり長く続い

ています。聖書には、イエス・キリストが水を飲んだとは書かれていません。つまり、イエス・キリストがサマリア人の女性に声をかけた理由は、この女性と話をすることが目的だったということになります。

イエス・キリストは、正午ごろに水を汲みに来るような、誰からも相手にされないようなこの女性に対して、独りぼっちで生きていくしかないと思っていたこの女性に対して、声をかけてくださったわけです。

イエス・キリストは、「この水を飲む者はだれでもまた渇く」（一三節）と言われました。サマリア人の女性が、毎日毎日、暑い時間帯に井戸まではるばると汲みにくる水。いくら汲んでも、次の日の分まで水は残りません。今日苦労して水を汲んでも、明日もまた同じ苦労をして水を汲まなければなりません。汲んだ水を飲んでも、すぐにまた喉は渇きます。

イエス・キリストは、続けて「わたしが与える水を飲む者は決して渇かない」（一四節）と言われました。渇くことのない水、そんな水があったら、どんなによいことでしょうか。ただし、イエス・キリストが言われたのは、普通の水、井戸から汲んできたり、水道から出てきたりする水のことではありません。その水は、「わたしが与える水」であり、「その人の内で泉となり、永遠の命にいたる水がわきでる」（一四節）という水です。イエス・キリストは、私たちに水を与えてくださり、その水は、私たちの内で泉となります。泉と言うのですから、私たちの内がその水で満たされると

いうことになります。

この水は、「永遠の命に至る水」です。「永遠の命」とは、不老不死とか、永遠に死ぬことはないとか、そういう命のことではありません。神様が共にいてくださる命のことです。

イエス・キリストが与える水を飲むとき、私たちの内は、その水で満たされます。「永遠の命」に至る水、神様と共に生きる命に至る水で、私たちが満たされるとは、私たちの内に神様がいらっしゃるということです。私たちの内に神様がいると言えるほど、神様はわたしたちの近くにいてくださる。「わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわき出る」とは、こんなにも近い、神様と私たちとの関係を伝える言葉です。

サマリア人の女性は独りぼっちでした。その女性にイエス・キリストは声をかけてくださり、「永遠の命に至る水」で満たされるという話を告げてくださいました。それは、神様があなたのそばにいる、神様があなたと共にいてくださることを伝えるためでした。

暑い時間帯に井戸に水を汲みに来なければならないあなたは、自分のことを誰からも相手にされない、独りぼっちの存在だと思っているかも知れない。でも、そんなことは決してない。神様はそのあなたに声をかけた。そして、あなたの内は「永遠の命に至る水」で満たされている。だから、もうあなたは一人ではない。あなたは、神様と共に生きる命を生きている。イエス・キリストは、サマリア人の女性にこのように伝えてくださいました。

この女性は、独りぼっちで生きてきたのでした。しかし、イエス・キリストから話しかけられて、イエス・キリストと対話して、彼女は変わりました。水がめを置いて、町に行きました。人との関わりを避けていた女性が、自分から人々の中へと出ていくようになったのです。そして、イエス・キリストのことを人々に伝えました。この女性は変えられました。イエス・キリストに出会い、イエス・キリストとの対話を通して、神様が自分と共に居ることを知り、力づけられて一歩を踏み出しました。このように、神様によって変えられること、それが救いです。

イエス・キリストが話しかけてくださるのは、イエス・キリストが救ってくださるのは、聖書に出てくるサマリア人の女性だけではありません。今日一緒に、この聖書の箇所を聞いている私たちに対しても、神様は話かけてくださっています。

イエス・キリストが一人の女性に声をかけてくださったことから、始まったことがあります。この女性が変えられました、救われました。独りぼっちだった彼女が、皆の輪の中に入るという一歩を踏み出しました。私たちも、変えられます、救われます。私たちに対しても、神様は話しかけてくださっているからです。私たちはチャペルサービス（礼拝）で神様の言葉を聴いています。それは、サマリア人の女性にイエス・キリストが話しかけてくださったのと同じように、私たちに対しても神様が語りかけてくださっているということです。そこからイエス・キリストとサマリア人の女性との対話が始まったように、私たちも神様と対話するということです。こうして神様と対話す

るとき、私たちも、この女性のように変えられます。新しい一歩を踏み出すことができます。私たちの人生を変える、私たちを救う、神様の言葉を聞いてみませんか。

（二〇二四年一一月二八日　緑園）

天使が来るのは、誰のところ

ルカによる福音書　二章八～二〇節

松村　はるか
（宗教センター）

クリスマスが近づいてまいりました。みなさんは、天使の存在を信じていますか。可愛らしくキャラクターのように描かれる天使は、メルヘンの世界のような印象でしょうか。

聖書を見回してみますと、天使の存在はそこかしこに出てきます。そして、天使は、私たちの周りにいて、私たちを守るために神さまから遣わされている、ということを、聖書は明確に語っています。

今日は、ルカによる福音書に示されている、羊飼いたちにイエスの誕生が告げ知らされる場面を、皆さんとともに味わいたいと思います。

「今日、ダビデの町に、あなた方のために、救い主がお生まれになった。」と天使は羊飼いに告げます。天使は、神さまの言葉を羊飼いのところに運びました。羊飼いたちは、イエス様の誕生の知

らせを、神さまの声で直接聞いたのではなく、天使によって告げられたということです。聖書には、天使は、神さまと人間を、つないでくれる存在でとして描かれています

天のみ使いに、天の大軍が加わり、神さまを賛美します。「いと高き所には栄光神にあれ、地には平和、御心に適う人にあれ。」

み使いたちが天を去ると、羊飼いたちは話し合いました。「さあ、ベツレヘムへ行こう。主が知らせてくださったその出来事を見てみようではないか。」そして、羊飼いたちはベツレヘムへ行き、マリアとヨセフ、そして飼い葉おけに寝かされている乳飲み子を探し当てたのです。

羊飼いは、権力をもった存在でもなければ、知識をもつ人々でもありません。ユダヤには、律法学者や祭司長のような、神さまに仕える人々がたくさんいました。それに対し、羊飼いは、礼拝に出ることもできません。1年のほとんどを屋外で過ごします。何もない、真っ暗な中で、夜通しひつじの番をするのは、どれほど不安だったことでしょう。寂しく、孤独だったに違いありません。

救い主の誕生という、この大きな喜びの知らせが真っ先に届けられたのは、羊飼いのところでした。権力のあるものではなく、ただ弱く無学の羊飼いのところに、「全世界への救い」は告げられました。

羊飼いたちは、ベツレヘムへ行きました。長く遠い道のりだったに違いありません。何の保証もなく、確かなことは何もなく、それでも、天使が告げた言葉をただ信じて、羊飼いたちは自らベツレヘムへ行きました。

この「行く」という行為は、聖書の中でとても大切にされています。「行く」というのは、他者と自分を隔絶する自らの殻を破って、外に出ていく、ということです。身分も低く、当時、蔑まれていた羊飼いたちは、天使のみ告げに驚いたり喜んだりするだけでなく、自分の意志で自らの殻を破り、自分の足でベツレヘムへ行ったのです。

天使たちの歌声は、静かにふけ行く夜に、美しく響いたに違いありません。そして、今日の讃美歌にあるように、天使たちは、今もなお、そのみ翼を私たちにのべ、疲れたこの世を覆い守っています。重荷を負いつつ、世の旅路に悩める私たちのために、天使は、今なお、遣わされているのです。

それに気づくかどうかは、私たち次第です。その声に、耳を傾けるかどうかも、私たち次第です。天使の声を聞き、自分の殻を破って前に進むかどうかも、私たち次第です。

クリスマスが近づいてまいりました。主のご降誕を待ち望むこの季節、私たちは幾度となくこの羊飼いの物語に思いを馳せます。クリスマスは、神さまのよき知らせを告げる時でもあります。自分を無力だと感じるとき、孤独だと感じる時、それは、心を静かに、天使の声に、耳を傾ける時かもしれません。そんな時にこそ、神さまは、時に適って、私たちのところに天使をお遣わしになっているのです。

主のご降誕を待ち望むこの季節は、一年の終わりの時であり、教会歴では、一年の始まりの時です。孤独な羊飼いのところに天使が遣わされたこと、そして、天使の告げた言葉をただひたすら信

じて、自らの足でベツレヘムに行った羊飼いたちを心に覚え、祈りを深めたいと思います。

（二〇二四年一二月一七日　緑園）

「クリスマス・キャロル」

ルカによる福音書　二章八～一四節

松　本　奈穂子
（英語で学ぶグリーン経済）

クリスマスおめでとうございます。

私は白楽の丘の上にある教会で教会学校教師の奉仕をさせていただいています。私たちの教会では、こどもクリスマス会を例年12月の第2日曜日に実施しています。

クリスマス会のメインプログラムのひとつは、クラスごとの出しものです。私の担当は幼児クラスで二人の女の子が毎週通ってくれています。クリスマス会の準備を始めるにあたり、「今年はクリスマスで何の役がしたい？」ときいてみると、「天使の役がしたい！」という答えが返ってきました。そこで、ただいまお読みしました羊飼いと天使の場面の短い劇をすることになりました。このままだと幼児には難しいので、簡単な表現に書き直した台本を作りました。こどもたちは、頑張ってせりふを覚え、本番も大きな声で発表してくれました。

さて、この羊飼いと天使のお話はクリスマスの重要なシーンです。羊飼い、と聞いても現代の私たちには想像するのがとても難しいのですが、当時のユダヤ社会では居場所がなく軽蔑されていた職業だったそうです。羊の世話をするという仕事柄、ユダヤ教の儀式律法や安息日の決まりを守ることができなかったからです。また、この時期にローマ帝国の命令で行われていた住民登録の対象にもなりませんでした。

クリスマスのお説教では、よく、「貧しい羊飼いが天使から救い主誕生の最初の知らせを受けたということは意味深いことだ」、と語られます。そのようなメッセージを私も何度も聞いているのですが、正直頭で理解できても感情的に入り込めない時もありました。しかし、やっと最近その重みが心に深く響くようになりました。年を重ねてきたからということもあるかとは思いますが、「貧しい」という言葉を聞く機会が増えてきているのも理由のように思います。

気が付けば、何かにつけて、「日本は貧しくなった」と耳にするようになりました。では実際どのくらい貧しいのかと政府のデータを調べてみました。厚生労働省の調査では、日本の「相対的貧困率」は２０２１年に15・４％だったとのことです。相対的貧困とは、統計的には所得が集団の中央値の半分の「貧困線」に届かないことを意味します。平たく言うと、「生きるか死ぬかの飢餓レベルというわけではないけれど、同じ国・地域の人と比べて（相対的にみて）収入・資産が少なく、生活も厳しく不安定な状態」を指します。つまり、日本人の６・５人に一人は厳しい生活を強いられているということになります。では昔に比べて貧しくなっているのでしょうか。相対的貧困率を

見ますと、確かに30年前に比べると1・9ポイント高くなっています。この統計は3年前のものですが、この数年追い打ちをかけるように物価上昇が続いていることから、生活の苦しさはますます増していると思われます。

世界では、新型コロナウイルスの感染拡大の影響で、富裕層と貧困層の格差が広がっていると言われています。世界不平等研究所が2021年12月に発表した報告書によりますと、世界の上位1％の超富裕層の資産は世界全体の個人資産の37・8％を占めており、下位50％の資産は全体の2％にとどまったそうです。日本はといいますと、最上位1％の占める資産は24・5％、下位50％の資産は5・8％でした。報告書は、日本の富の分布について、「欧州ほどではないが非常に不平等」であり、1980年代から収入格差が広がっていると指摘しています。

さて、貧しさとクリスマスといえば思い浮かぶのは、イギリスの作家チャールズ・ディケンズの小説「クリスマス・キャロル」です。主人公のスクルージが、自分の過去、現在、未来をクリスマスの幽霊に案内され、心を入れ替えるお話です。私は12月になるとこの本を読み返している（正確にいうとオーディオブックで聴いている）のですが、そこに描かれる人々の生活は貧しさとの闘いでもあります。

この小説が発表された1840年代のイギリスは、産業革命による急速な工業化の中にあり、貧富の差が拡大した時代でもありました。ディケンズ自身も父親の破産で経済的に苦労した経験があり、作品を通じて貧困や格差社会の深刻さを社会に訴え続けました。

なんだか、今の時代の状況にも重なる部分がないでしょうか。時代は今ＡＩ革命の真っただ中、格差はさきほどお話したとおり広がっています。現実だけを見ると暗い気持ちになってしまいそうになりますが、聖書は私たちに希望を与えてくれます。

ルカによる福音書四章一八節～一九節にはこう書かれています。

「主の霊がわたしの上におられる。
貧しい人に福音を告げ知らせるために、
主がわたしに油を注がれたからである。
主がわたしを遣わされたのは、
捕らわれている人に解放を、
目の見えない人に視力の回復を告げ、
圧迫されている人を自由にし、
主の恵みの年を告げるためである。」

ここにある「わたし」とは、イエス・キリストのことです。イエス様が地上に遣わされたのは、「貧しい人に福音を告げ知らせるため」、「圧迫されている人を自由に」するため、とはっきりと書かれています。

貧しさを身近に感じる今こそ、イエス・キリストの降誕の本当の意味を理解でき、感謝できる時なのかもしれません。クリスマスの意味を深くかみしめつつこの時期を過ごしたいと思います。クリスマス・キャロルの物語はこのような言葉で閉じられています。

“God bless us, everyone.”

神さまの祝福が私たちすべての人々の上にありますように。

（二〇二四年一二月二十日　緑園）

求めなさい。探しなさい。

マタイによる福音書　七章七～一二節

N・H
（宗教センター職員）

皆さんは、「座右の銘」や「自分の指針となる言葉」などはありますか？

私にとって、今読みました聖書箇所がそれに当たります。

今日は、短い時間ですが、私とキリスト教との出会いや関係などについて、お話しできればと思います。

私が最初にキリスト教に出会ったのは、幼稚園生です。

家の近所の幼稚園に通っていましたが、その幼稚園がキリスト教のカトリックの幼稚園でした。

その頃は幼稚園生ですから、「キリスト教だ！」と思うことなく、幼稚園にシスターがいること、毎日ミサがあること、お祈りをすることは、ごく普通の当たり前のことで、何の疑問も持たずに、毎日を過ごしていました。

小学校にあがり、小学校・中学校・高校と過ごしたのも、キリスト教の学校です。
小学校からはフェリスと同じプロテスタントの学校でした。
学校には「宗教の先生がいて、毎日の礼拝があり、讃美歌を歌い、お祈りをし、道徳の授業はないけれど、代わりに宗教の授業がある」、そんな学校でした。
毎日の礼拝や宗教の授業で、聖書を読んだり、神さまやキリストの話、聖書の話を聞いたりしますが、今日読んだ聖書箇所も、そのような中で出会った聖句です。
もう一度、今日の聖句を読んでみたいと思います。

「求めなさい。そうすれば、与えられる。探しなさい。そうすれば、見つかる。門をたたきなさい。そうすれば開かれる。だれでも、求める者は受け、探す者は見つけ、門をたたく者には開かれる。」

この聖句を読んだとき、皆さんはどのような印象を受けるでしょうか。
小学生だった私は、ものすごく単純に、文字通りに、この言葉を受け取ったことを覚えています。
「求めなさい。そうすれば、与えられる」→「何か欲しいと思ったら、もらえるんだ！」
「探しなさい。そうすれば、見つかる」→「何か失くしても探せば出てくるね！」
「門をたたきなさい。そうすれば、開かれる」→「扉をノックすれば、扉が開くんだね！」と。

日常生活の延長線上の話のように、とらえたのを覚えています。
「日常生活の延長線上」という意味では、キリスト教を「特別な、自分とは全くの別世界のもの」とはせず、身近なものとして、感じていたのかもしれません。
ただ、この聖句は単純に「欲しいものが手に入り、探し物が見つかり、行きたいところに行ける」という話ではありません。
この聖句が私たちに教えてくださっている意味を理解し、物事を進めるうえで、自分の核となるような、「座右の銘」や「指針となる言葉」として心に留めるようになったのは、私が高校生の時です。
高校のクラブ活動に「オルガン部」があり、そこで私は本格的にパイプオルガンを始め、「大学でパイプオルガンを専門的に学びたい」と思うようになりました。
皆さんは「パイプオルガン」というと、どのようなイメージでしょうか？
今は、「コンサートホールの正面にある大きな楽器」や「結婚式場にある楽器」というイメージを持つ方が増えてきましたが、私が高校生の頃は、コンサートホールよりも「教会・チャペルにある楽器」というイメージが大半を占めていたと思います。
もちろん、毎日学校で礼拝をしていた私も、「礼拝で演奏する楽器」というイメージでした。
「パイプオルガン」を学ぶ上で、さまざまな作曲家の、いろいろな曲を勉強していくことになりますが、楽器の性質上、キリスト教に関わりの深い曲にたくさん出会います。

そうした中で、私はパイプオルガンだけではなく、キリスト教に関してもそれまで以上に学ぶこととなり、自分の中で強い結びつきとなり、受洗をしようと決心します。

牧師先生から「パイプオルガンに導かれた受洗だね」と言われるくらい、私の中ではパイプオルガンから派生した受洗でした。

大学でパイプオルガンを専門的にしようと思ったとき、何かを専門的にやるのであれば、消極的な受け身ではなく、積極的にやっていかなければ！と自分の中で思い始めました。

そのようなときに、今日の聖句の意味をしっかりと理解したように思います。

「求めなさい。そうすれば、与えられる。」

この時、求める気持ちが曖昧なものではなく、しっかりと熱心に求めなければなりません。逆に言えば、適当な感じで求めれば、何も与えられないのです。

「探しなさい。そうすれば、見つかる。門をたたきなさい。そうすれば、開かれる。」

これらも同じことで、ちゃんと何かしらを見つけたければ、道が開いてほしいのならば、自ら動き、前に進んでいかなければならない。「身勝手なことをしたり、願うだけで何もしないのとは違う」ということです。

神さまは、私たちのことを見ていて、「求め、探し、門をたたく者」には、その人にとって一番良いものをお与えくださいます。

まったく手を抜かず、いつも力いっぱい求めることは難しいかもしれません。

ただ、私の「心の中心」にこの言葉を置いて、「座右の銘」のように、くじけそうなときに、自分を動かす言葉としています。

皆さんによっても、何かしら「座右の銘・指針となるもの・ちょっとした気になる言葉」があるかと思います。

それは、聖書の言葉かもしれないし、誰かの名言かもしれません。

もしかしたら、年月が経てば、新しい言葉に出会い、「座右の銘・指針となる言葉」が更新されていくかもしれません。

これからの皆さんが、たくさんの心に留まる言葉に出会うことを願い、祈っております。

（二〇二五年一月一六日　山手）

「大きな家」

マタイによる福音書一八章一八節二〇節

T・O
（事務部長）

今日のタイトルは映画のタイトルです。

昨年の12月に公開された作品で、私は冬休みに見ることができました。ドキュメンタリーという地味なジャンルで公開規模が小さいので、ご存じない方がほとんどかと思います。この中で御覧になった方はいますか？

この映画は児童養護施設で過ごす子どもたちを追った作品です。一人の子どもに焦点をあてるわけではなく、施設を出る18歳までの様々な年齢の子に少しずつ焦点をあてた、オムニバスのような構成です。

小学校入学前にランドセルを選ぶ子、初めて都会の美容室で髪をカットする思春期の子、部活に打ち込む高校生、施設を出る前に、それまでの集団生活から施設を出たあとの一人暮らしに備えて、

その練習をする子、将来アクション俳優になることを目指してトレーニングに打ち込む子、など、どの登場人物であってもいまを生きる子どもたちの日常が伺えます。

映画のタイトルが「大きな家」なので、見る前は、成人になるまでのほとんどの期間をこの施設で過ごす子どもたちにとって、施設が家、そして一緒に過ごす人たちが家族のようなものであるということが、作品の中で示されるのかなぁと思いながら見ていたのですが、見終わってみる少し違った印象になりました。

さきほどこの作品は多くの子どもたちの日常が見えるといったのですが、ひとつだけ違うことがあります。

それは、「この施設はあなたにとって家族ですか」という問いが差し込まれる点です。

もちろん、回答は一人ひとり異なりますが、この回答に私は一定の傾向を感じました。皆さんはどんな傾向を予想しますか？

私の目には小さい子ほど、あっけらかんと、家族じゃないと軽々と言い切るように感じました。

その回答には特段の悩み、苦しみ、とまどいがあるようには見えず、割とシンプルに、本当の親が別にいる、血のつながりがない人は家族ではない、という認識が大きな位置を占めているようでした。

これが小学校の中学年ぐらいになると、学校や社会との関係の中で、あるいは施設内での人間関係の中で、「軽々しく家族と呼ぶな」という反発からなのか、施設は自分の家ではない、家族では

ないと自分に言い聞かせるようにいっているように見えたのが印象的でした。

そして、高校生、あるいは高校を卒業して施設を出た子たちの回答からは、振り返ってみると家だったんだなぁ、家族だったんだなぁというようなニュアンスが伺えました。

これはことばだけでなく、18歳になって施設を出た子が、施設での夏祭りといったイベントの際に、施設に戻ってきて一緒に出店（でみせ）で焼きそばを焼くというシーンがあり、そのシーンでのふるまい、たたずまいを見た私は、「ああこれは帰省だなぁ」と思ってしまいました。

また、映画のなかでは、個人に焦点を当てずに、あるイベントに焦点を当てる一幕があります。そのイベントは野外宿泊を伴う長距離ハイクです。山あり川ありのふつう長距離ハイクのようなイベントを映像化すると、短い期間のなかで人間ドラマが繰り広げられるというのがありがちですが、この作品ではそんなシーンはなく、たんたんと年齢、体力の違う子どもたちの集団が歩くシーンを映し出すだけです。

特段仲よくじゃれあうようなシーンがあるわけでもない、かといって体力の劣る子を放り出すわけでも、過剰に保護するわけでもなく、でも見捨てずにみんなで歩く、ただひたすらに歩く、そんな一幕です。そこに私はまるで兄弟みたいという印象を強く持ちました。

さて、本日読んだ聖書箇所のうち最後の「二人または三人が私の名によって集まるところには、私もその中にいるのである。」という箇所は、教会を考える際に、よく言及される聖書箇所です。

「私の名によって集まる」とはどのような人なのでしょうか。単にイエス・リスト、イエス様を

あがめ、たてまつり、信奉するひとのことでしょうか。

私の理解ではその前の節である18節で「はっきり言っておく。あなたがたが地上でつなぐことは、天上でもつながれ、あなたがたが地上で解くことは、天上でも解かれる。」と述べられていることばに該当する人なのではと思います。

ここでの「二人または三人」という言い方は、当時のユダヤ人の宗教の裁判の規則にある、人を有罪と断定するには一人の証言では不十分であり、少なくとも二人、できれば三人の証言が必要だ、という趣旨の規定で、当時の人たちにとっては当然の知識として持っていることが前提とした言い回しだそうです。

これを前提とすると「つなぐ」ということばが「赦さずに有罪とする」ことに対して、「解く」が「赦す、無罪放免」ことをことさらに強調しているように感じます。

このように「赦す」ことのできる人が二人又は三人さえいれば、そこは教会＝神の家族なのだといえるのだと思います。

今日お話しした児童養護施設で育つ子どもたちにとって、血のつながりがなくても戻ってくる場であるこの施設は、「赦し赦されることができる家族なのではと思います。

今週のテーマは「出会い／別れ」でした。学期末、年度末なので卒業に向けたテーマなのだと思います。

出会いがあれば別れがある、これは必然的なものです。

しかし「赦し赦される」相手、友人がいればそれは神の家族であるといえるのかもしれません。皆さんが、この学校でそのような友人、知人、先生と出会えることができることを祈っています。

最後に、この映画はまだ上映しています。子どもたちのプライバシー保護のため、配信やテレビ放映、パッケージにはならず、映画館でしか観られないとのことでした。

もし興味がわいたらぜひ観てください。

あとがき

二〇二四年も終わり、私たちは二〇二五年を迎えていますが、二〇二四年を振り返ると、ウクライナやパレスチナにおける戦争、日本国内では元日早々に石川県の地震や記録的な猛暑、空前の円安など、様々な事件が起こりました。また、国外ではアルベルト・フジモリ、アラン・ドロン、国内では小澤征爾、谷川俊太郎、中山美穂、西田敏行と、多くの方々が惜しまれつつ亡くなりました。

「二〇二四年は大変な危険や悲惨な出来事が次々と私たちを襲った年だった」とおっしゃってる方もおられます。確かにその通りでしょう。しかし考えてみてください、「今年は平穏無事で何事もなかった一年だった」、「今年はいいことばかりの一年だった」などという年が、かつてあったでしょうか？　イエス・キリストのご降誕から二〇二四年経ちましたが、それ以来今日までずっと世界は変わることなく災厄と悲惨に襲われ、苦難の中を歩んできました。しかも、来年は平穏無事でいいことばかりの年になるだろう、などという見通しはまったくありませんし、おそらくそんな年はやって来ることはないでしょう。

イエス・キリストに洗礼を授けたバプテスマのヨハネは、獄中から人をやってイエス・キリストにこう尋ねたと聖書にあります、「来るべき方は、あなたでしょうか。それとも、ほかの方を待たなければなりませんか」（マタイ一一・3）。「来たるべき方」というのは、旧約聖書に預言されてい

るメシア＝キリストのことです。バプテスマのヨハネですら、イエスが本当にキリストであるかどうか確信が持てず、疑ったのです。ヨハネはこの出来事のしばらく後に殺されてしまいます。ヨハネだけではありません。イエス以前にもポンテオ・ピラトによって殺された人たちがいましたし、また、多くの死者を出した事故もありました（ルカ一三・1～5）。イエスの死後も、紀元七〇年には戦争でエルサレムは焼き尽くされ、神殿も破壊されてしまいました。そのような現実を見ると、「キリスト＝救い主が来られた」と言われても、「それは本当なのか？」という疑いを抱いても当然でしょうし、バプテスマのヨハネならずとも、「イエスは本当にキリストなのか？」と問いたくなるでしょう。

ヨハネの問いに対して、イエスはこう答えます、「目の見えない人は見え、足の不自由な人は歩き、重い皮膚病を患っている人は清くなり、耳の聞こえない人は聞こえ、死者は生き返り、貧しい人は福音を告げ知らされている」（マタイ一一・4～5）

イエス・キリストがこの世界にやって来て、キリスト教が誕生しました。そして、イエス・キリストに触れ、「自分もキリストにならって生きたい」、「キリストに従う生き方をしたい」という思いを抱くようになった方たちがあらわれるようになりました。

大阪でシナピスというカトリックの難民支援団体で活動している方が、「たった一人を助ける」という思いで活動されているというお話を伺いました。私たちは世界中の困っている人すべてを助けることはできないでしょうし、世界から困っている人が一人もいなくなる日が来ることもないで

しょう。しかし、たった一人の、自分のごく身近にいて、自分に助けを求めている人の力になんらかの形でなることはできるかもしれません。マルティン・ルターは、「隣人に対してキリストになる」と言いましたが、そのような志をもって活動しておられる方が大勢いらっしゃいます。

イエス・キリストがこの世界にやってこられてから二〇二四年が経ちましたが、この世界は二〇二四年前と変わらず悪と悲惨さに満ちているように見えます。しかしそれにもかかわらず、その中で、救い主＝キリストの力が確かに働き、その光が輝き、世を照らしているのを、私たちは確かに見るのです。そしてその力はみなさんの中にも働いており、その光はみなさんも照らしています。さらに、みなさん自身がその光を輝かせ、その光でみなさんの回りにいる人を照らすこともできるのです。

マザーテレサは、ユダヤの格言を引用して、「暗いと不平を言うよりも、あなたが進んで明かりをつけなさい」とおっしゃいました。二〇二四年にはさまざまな暗い出来事や事件が起こりました。また二〇二四年は多くの方たちが惜しまれつつ天に召された年であると同時に、後で振り返れば二〇二四年は多くのすばらしい方たちが生まれた年としても覚えられるでしょう。そんな中で救い主キリストの光で照らされ、さらに私たち自身がその光で回りを照らす人として歩めるならば、それは本当の意味での二〇二五年＝救い主の誕生から二〇二五年目の世界を生きる生き方となるのではないでしょうか。

宗教主事　相澤　一

ＨＰ掲載を許諾いただいた方の原稿のみを掲載しております。

2024年度　大学礼拝アンダハテン

2025年３月７日　発行

発行　フェリス女学院大学　宗教センター
〒245-8650　横浜市泉区緑園4-5-3
印刷　勝美印刷株式会社